

アメリカン・ボードのボルネオ伝道

溝口 靖 夫

目 次

- 一、は し が き
- 二、ボルネオにおけるヨーロッパ列国の進出
- 三、ボルネオにおけるアメリカン・ボードによる伝道の準備
- 四、ボルネオにおけるアメリカン・ボードによる伝道の経過
- 五、む す び

一、は し が き

アメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions—A.B.C.F.M.) の日本伝道は一八六九年 (明治二年) にグリーン (Daniel Crosby Greene, 1843—1913) が来朝した時に始まるが、これより前に、すでに東亜の諸地域に宣教師が送られていた。同会は一八二〇年マサチュセッツの大会で設立され、一八二二年には最初の伝道者がインドに派遣された。一八二九年にはアビール (David Abeel, 1804—1846) とブリッジマン (Elijah Coleman Bridgman, 1801—1861) とが中国の広東に送られていた。シヤムにも一八三一年アビールがバンコックに伝道を始め、その後一八三四年に第二の宣教師が派遣され、彼らはこの地で伝道した。東インド諸島にもア

メリカン・ボードの関心が向けられたが、ここではボルネオのみが辛うじて伝道地として開かれたのである。東インド諸島はオランダの勢力にあった場所であり、他の場所とその事情が大いに違っていた。

アメリカン・ボードはわが国に伝道を始める前に、海外で、東亜以外でも、アフリカ、トルコ、ハワイ、ミクロネシア等の諸地域で伝道をしていたが、特に東亜において、どんな活動をしていたかは、われわれの関心をひくものである。しかもボルネオはアメリカン・ボードの伝道地としてはアフリカとともに文化の最も後れたところであり、その伝道も甚だ困難であつたので、アメリカン・ボードが経験したミッシェン事業の中でも異色のあるものである。

二、ボルネオにおけるヨーロッパ列国の進出

ボルネオがヨーロッパ人に知られ始めたのは、一五一一年ポルトガル人によるマラッカ攻略の時以来のことである。このときポルトガルの総指令官アルブケルケ (Afonso d'Albuquerque, 1453—1515) はアブレウ (Antonio d'Abreu) を派してモルッカ諸島の方面を探検せしめ、土人達と親善を結んで来るように命じている。アブレウは、はじめてボルネオの南岸を航行し、アンボイナに到着し、一五一四年マラッカに帰った。これより数年後、スペイン国王カルロス一世の援助により航海に出たポルトガル人の航海家マガリャエンシヤ (Fernão de Magalhães — マジヤラン) 《英》 Ferdinand Magellan, 1480頃—1521) 一行は西廻りで、フィリピンに渡来し、その地でマガリャエンシヤが土民と戦い横死した後、その乗組員達はサンルカルに帰港の途中、一五二一年ブルネイの町に上陸したのであり、これがヨーロッパ人として本島に到来した先駆である。一五二六年にはポルトガル人が来島し、一五三〇年以後はブルネイと貿易することができたが、十七世紀の初め彼等はボルネオ島から駆逐された。スペイン人もまた貿易を欲したが成功しなかった。殊に一五六七年にはブルネイのサルタンを攻撃し、一六四五年にはボルネオ人から受けた度重なる海賊的行為を懲らすためボルネオを襲うなどのこともあり、ますます住民との関係を悪くしたのである。

この間にあって、オランダ人は一六〇三年バンタムにオランダ連合東インド会社の居留地を設け、ここを根拠として漸次東インド諸地域に進出したのである。かれらは翌年の一六〇四年にはボルネオの西海岸で貿易を始め、一六〇八年ランダクとスカダナに根拠地をつくり、その翌年にはバンジエールマシムからスペイン人を追い出してこの地のサルタンと貿易の特権を確保し、一六四三年には要塞と商館をつくった。

イギリス人もまた一六〇九年にはボルネオに来島し、一六九八年までにはバンジエールマシムに商館をつくりオランダ人と勢力を争ったが、一七三三年敗退した。オランダ人は更に一七四八年バンジエールマシムの酋長と条約を結んで香料の独占権を獲得し、また一七七八年にはボンチアナクに第二の根拠地をつくった。こうして十八世紀末までにはイギリス人は本島から一時全面的にその根拠地を失ったのである。これ以来オランダ人のボルネオにおける勢力は強固なものとなったが、一八〇九年にはオランダ東インド会社はこの地からあまり利潤があらがないので、東インド総督ダーンデルス(H. W. Daendels, 1762—1818)はこの地の利権を一時放棄したことがある。かくしてボルネオ人はヨーロッパ人の後退に際して勢力をもち返したが、一八一二年オランダ人は本島の西南部の諸地域——サンバス、マンパワ、ボンチアナク、及びマタン等——を領有し、これと条約を結び、この地域の酋長がオランダ以外の他のヨーロッパの諸国及びアメリカと条約を結ばないことを約束させた。イギリスはその後もボルネオに進出を試み、一八三九年にはジェームス・ブルック(James Brooke, 1803—1868)がサラワク地方の土侯ムダ・ハッシム(Muda Hassim)を援助してダヤク族の叛乱を平定し、一八四一年この地方の統治権を譲られ、又、一八四七年にはブルックはラブアン島を譲渡せしめ、これ以来オランダを北部から締め出したが、それは却ってオランダ人の南部における活動を刺激した。一八七七年イギリス人アルフレッド・デントは北ボルネオの地を獲得、遂に一八九一年ボルネオにおける英蘭国境が確定し、北部はイギリス、南部はオランダの支配下におかれることになった。アメリカン・ボードの伝道がなされたのはボルネオ島の南部から西部にかけてであり、その伝道の行われた一八三九年から一八四九年までの時期に

おいては、その地域は大体オランダの統治権の下におかれていたのである。

三、ボルネオにおけるアメリカン・ボードによる伝道の準備

アメリカ人の東亜伝道はイギリス人に少し後れて始められた。すなわちイギリス人の東亜伝道の開拓者はモーリソン (Robert Morrison, 1782—1834) であり、彼は一八〇七年中国のマカオに到来し、広東において伝道の準備をした。彼に続いて一八一三年には同じくイギリス人ミルン (William Milne, 1785—1822) が同地に派遣されたが、彼はマカオに上陸を許されないで、マラッカに落着いてその地に英華学堂 (Anglo-Chinese College) を開いた。一八一七年にはイギリス人として第三の東亜伝道者メドハースト (Walter Henry Medhurst, 1796—1857) がマラッカに着任、ここを中心に東亜の各地に伝道した。

アメリカン・ボードの東亜伝道が始められたのは、これら中国及びマラッカの伝道との関連をもつものであり、その端緒は、中国に派遣されたアビールの進言によるものである。

アメリカの中国貿易はドイツを除けばヨーロッパ諸国のどの国よりも遅く仲間入りをした。それは一七八四のこと、イギリスから独立した翌年である。従来イギリスに気兼ねしたアメリカは独立早々エムプレス・オブ・チャイナ号を中国に送り、ここにアメリカと中国との関係が始められた。

アメリカの中国伝道はそれより四十五年後、一八一〇年にアメリカン・ボードが設立され、前述のようにこの団体からインドに宣教師が派遣されたのを始めとして、東西に相ついだ宣教師が送られることになった。すなわち一八二九年アメリカから二人の伝道者が中国に向った。ブリッジマンとアビールがそれである。二人は一八三〇年二月広東についた。ブリッジマンはアメリカン・ボードの宣教師として、アビールはアメリカ水上友愛会 (The American Seamen's Friend Society) から中国にいるアメリカ人の船員達へのチャプレンとして送られたものである。アビー

ルはこの友愛会との一年間の契約がすんだときアメリカン・ボードに移った。このときアメリカン・ボードは彼にジャワ、シンガポール、シヤム等の調査を行わせることになった。彼は一八三二年一月バタビアに着、ここでロンドン外国伝道協会のメドハーストにより迎えられた。アビールは彼の家に数ヶ月間世話になり、メドハーストの伝道を助けるかたわら、中国語を学び、六月にシンガポールに、更にロンドン外国伝道協会のトムリン (Tomlin) と一緒にシヤムに向った。同地に七月一日着いたが、丁度そのときのギュツラフ (Karl Friedrich August Gutzlaff, 1803-1851) はこの地を立って中国沿岸の航海に向った後であった。彼はこの地で六ヶ月の活動の後、年末シンガポールに帰ったが、その後健康を害して一八三三年アメリカに帰えり、東亜諸地域がアメリカ人の伝道が必要とすることを述べた。

彼はアメリカへの帰途ヨーロッパ各地ーイギリス、オランダ、フランス及びスイス等ーで東亜伝道の必要を述べ、多くの共鳴者を得たが、帰国後はアメリカの各地の教会や神学校で伝道精神を鼓吹した。また一八三五年には “Residence in China” を一八三八年には “The Claims of the World to the Gospel” を出版して多大の影響を与えた。⁽¹⁾

ここで特に注意をしておきたいのは、このアビールの影響によりアメリカン・ボードのボルネオへの伝道者が現われたのであるが、アビールを始め、彼らは全部北米オランダ改革教会 (The Reformed Dutch Church of North America or The Reformed Church in America) の会員であることである。この教派のものも海外伝道については、すべてアメリカン・ボードの宣教師として派遣されたのであり、この関係は一八三二年から一八五七年まで続いた。⁽²⁾

アビールのアビールによって、アメリカの教会に東インド伝道の必要が明かにされた。ただし、ジャワ島においてはオランダ政府は外国宣教師が住民に布教するのを喜ばないので、ジャワ周辺の方が布教に適當であることが指摘された。しかもまだスマトラとボルネオの実地調査はアビールによってなされていなかったので、アメリカン・ボー

ドは一八三二年ミントン (Samuel Munson, 1804—1833) とリマン (Henry Lyman, 1809—1833) をこの方面に派遣した。その時彼等に発せられたボードの本部からの指令はその意図を告げている。⁽³⁾

「委員会はあなたがたがスマトラ海岸に横たわるニアス島に進むことを勧める。この地の住民と交わりを得た後には、できれば更に進んでスマトラの西北部に到り、バッタ族の習俗と状況とを調査されたい。……この旅行を終えて暫らく休養をとり、委員会にその報告を提出された後は、アンボイナ島が伝道に適するかどうかを考慮されたい。……アンボイナに到れば、更にセラム、セレベス、ジロロ、ニューギニアその他の地域の島々に向うことは難事ではないであろう。……以上の島々の他、委員会の特に希望するのはボルネオ島に関する調査である。……この調査に当ってあなたがたの最も注意すべき事柄は、その踏破した島嶼や地域の風土であり、すなわち種々なる村落・住宅・言語・宗教・及び住民の智的・道德的・社会的慣習並びに彼らのキリスト教の教師に対する態度とともに、われわれが彼らに接近することのできる方法と彼らの間に伝道所を設ける場合その経営可能の見込みなどの諸点である。あなたがたの委員会への報告は最大の注意をもって作らるべきである。……その際誇張・着色・早合点等を警戒し、決して偏見・落胆・熱狂等のことがあってはならない。つねに沈着であれ。毎日・毎時祈りを忘れるな。あなたがたの責任の重大なるを記憶されたい。天よりの指導と援助と祝福がなければ、何事も為すことができないことを絶えず銘記すべきである。」

ムンソンとライマンはそれぞれ家族を伴って一八三二年九月バタビアに到着し、この年中は調査の準備に過ぎた。彼らは翌一八三三年オランダ東インド政府から許可を得て、スマトラ西岸に向い、六月十七日ニアス島からタパヌリに到着し、その奥地のバッタ族の村に調査旅行に進むことになった。しかるにこの地の事情に明るい人々は、当時奥地で部族間に戦闘が行われているので、甚だ危険であることを伝えたのであるが、また他の情報ではそれは誤りであるとのことであつたので、彼らは少数の従者を伴って二十三日いよいよ奥地に出発した。しかるに二十八日に至り、

遂に住民に包囲され惨殺されたのである。そのとき逃げた従者の報告によってその死が知られたが、彼らは住民により食べられてしまったとも言われるが、当時の事情から考えて確かではないとされている。⁽⁴⁾かくしてムンソンとライマンの旅行は失敗に終り、彼らはボルネオまで足を伸ばすことができなかった。しかしこの事件がアメリカに伝ったとき、アメリカ人をはじめ全世界のクリスチャンの間に、東インド伝道に関する熱情を喚起せしめ、彼の後に続こうとするものを輩出せしめたのである。

これより三年後、アメリカン・ボードの宣教師で当時シンガポールに到着のロビンズ (Samuel P. Robins) とアームス (William Arms) とは一八三六年スマトラに伝道する筈であったが、南部スマトラはオランダと住民との間に紛争があり、伝道に不適当であったので、アームスは先ずボルネオに探検に出かけた。彼は一八三六年六月ポンチアナクとサンバスとを訪れ、これより百哩程奥地に進んだ。彼はここにおいてダヤク族の村々を踏査し、その風俗慣習等を調査し、また伝道の可能性について確めた。彼はボルネオに四ヶ月留まり、この間サンバス以外の西部海岸をも回航し、一先ずその年の十一月シンガポールに帰った。彼はそこでボードに調査の報告をした。それによると、ポンチアナクと奥地における言語は同じではないが、同一種の別々の方言であると思われる。奥地にはオランダの実勢力は及ばず、ただ名のみに過ぎない。ボルネオはまだ布教地としては適していると思われるが、将来更に調査の結果、より有望な土地が見出されるかもしれないと云うに⁽⁵⁾あった。彼はシンガポールでその後の行動について指令を待った結果、ふたたびボルネオ行を命ぜられ、同年十一月末日に出発した。翌一八三七年三月ロビンズ夫妻もアームスの後を追ってボルネオに向い、四月到着した。

この年一月アメリカ人オリファント (D.W.C. Olyphant, 1789—1851) の所有船ヒンメーレー号 (The Himmeleh) がマカッサル、セレベス、ボルネオ、その他東インドの諸島の探検に出かけた。すなわちオリファント会社の経営者の一人であるキング (Charles W. King) は広東においてアメリカン・ボードのステイヴンス牧師 (Rev. Edwin

Stevens) と英國及外國聖書協會 (The British and Foreign Bible Society) の職員ハイン (G. T. radescant Lay) を招いて東インド諸島の探検を依頼した。キングの計画によれば、同諸島中とくにボルネオのブルネイ王国及びセレベス等を訪れ、これと親善關係を結び、その国において医療及び伝道事業を為すと同時に、彼らとの通商貿易を増進しようとするにあった。ただし彼は貿易種目の中から阿片と火薬類は除外したいと考えたと云われている。

ヒンメーレー号は一八三六年十二月三日マカオを出帆し、同月十五日シンガポールに到着した。しかるに翌一八三七年一月ステイヴンスはこの地で逝去した。そこでその後任としてシンガポールのアメリカン・ボードのディッキンソン (James T. Dickinson) とロンドン外国伝道協會のウルフ (Samuel Wolfe) とが任命され、三人は一緒に航海することになった。⁽⁶⁾ ヒンメーレー号は一月三十日シンガポールを出帆し、マカッサルに二月十日到着した。ここで彼らはbugis語で書かれた伝道用小冊子を住民に配布した。これよりテルナテ、ミンダナオ方面を調査して、ボルネオのブルネーに進んだ。レイの觀察によれば、ボルネオは近年經濟的にも人口の上でも衰退の一途を辿っており、又医療事業の開始にも不向きであると考えられた。彼らはこれら諸島嶼を調査して廻ったがその結果は思わしいものではないことが分り、ヒンメーレー号は空しく一八三七年夏にシンガポールに引揚げ、その後中国を経てアメリカへ帰還した。ヒンメーレー号の布教上の調査の結果は不満足なものであったが、しかもこれがアメリカ人の十九世紀の四十年台におけるボルネオの布教の捨石となったことは否めない。又同じくこれに続くオリファント会社の所有するモーリソン号は同一八三七年七月三十日江戸湾に現われたのであり、これが日本を訪れた最初のアメリカ船であったことを考えるならば、オリファント会社の占める文化史的意義は決して軽しとしないのである。⁽⁷⁾

アメリカン・ボード派遣のシンガポール駐留の宣教師であるアームスがボルネオの探検に向っていた同じ頃、ボードは在米オランダ改革教会員の宣教師をボルネオの本格的伝道を目指して派遣することになった。すなわちドティ (Elihu Doty)、エンニス (Jacob Ennis) ネヴィウス (Elbert Nevius) ヤングブラッド (William Youngblood)

等がそれであり、彼らは五月三十日按手札を受けてそれぞれ妻を同伴し、これにコンディット (Miss Azuba C. Condit) という女伝道師が加わり、アメリカン・ボードの宣教師に任ぜられて、六月八日出帆し、九月十五日バタビアについた。彼らはどこか定住して伝道することを許されるまで、一時同地に滞在することとなった。そして直ちにマライ語の研究を始めた。ドティとネヴィウスは中国語を、エンニスはオランダ語の勉強をした。翌一八三七年二月彼らはその中の二名がジャワ東部及びボルネオ、セレベス、モルッカ等に伝道を許可されるよう申請した。しかしオランダ東インド政府は回答を遷延して容易にこれを認めそうにもなかった。その中アメリカの経済界に恐慌があり、これが外国伝道にも影響して、彼らは徒らに経費をかけて永くバタビアに留まるわけにいかなくなった。この年八月になって、オランダの東インド政府は遂に回答を示したのであるが、それは満足なものではなかった。すなわち外国人宣教師はジャワ、セレベス、又はモルッカ群島に居住することができない。ただボルネオにおいてのみ布教を許すが、この地へ行く宣教師は予め一年間バタビアに滞在することを要する。この一年間オランダ政府の方針に反しないものであることが確められて後、ボルネオに至ることができる。またボルネオに居住後は絶えずオランダ官憲の監視の下にあって、その行動を役人により報告さるべきであることなどとなっていた。その他の東インドの諸島には、オランダ外国伝道協会の宣教師のみが布教を許されたのである。⁽⁸⁾ アメリカ宣教師の側では、必ずしもボルネオをもつて目指す土地と考えたのではないが、それ以外にその道を打開すべき方法もなかったのだ、これに従うこととなった。

翌一八三八年ドティは新来のポールマン (William J. Pohlman) を伴ってボルネオ西岸のサンパスに伝道所開始の打合せのため派遣され、四週間に亘ってその地のマライ人、中国人、ダヤク人、ブギス人等の居住地を視察した。その結果その年の暮、同会の宣教師達はシンガポールに集まり、ボルネオ伝道の準備相談会を開き、いよいよ翌一八三九年ボルネオに向ったのである。その間一八三八年夏から秋にかけて、エンニス夫妻はバリ島及びジャワの東方の諸

島を訪問した。この地方も彼らにとって未知の地域であつたので有益であつた。

四、ボルネオにおけるアメリカン・ボードによる伝道の経過

一八三九年六月十七日ドティはサンバスに、次にヤングブラッドは九月十九日ポンチアナクに、更にネビウスは十一月末シンガポールを出帆し翌年初めポンチアナクに、それぞれ到着した。コンディット嬢も一緒にこの地に着いた。彼らはこの年は殆んど何もできず、土地の探検や将来への準備に費した。しかるにエンニスは夫人の健康上の理由でボードから辞任した。又、トムソンとポールマンはこの年政府当局の命により、バタビアに留つた。

宣教師達はボルネオに来て見ると、ここはシャムよりも健康に適する様に思われた。またオランダ政府当局もこれらの宣教師がアメリカのオランダ改革教会員であるとの理由で、比較的寛大であることが喜ばれた。また住民中の主なる種族であるダヤク族は性質が概して温和であり、殆んど回教を信じていないので伝道に適するものと考えられた。当時ドティによってなされたボードへの報告によれば、次のようなことが述べられている。

「ダヤク族は性質が温和であり親切である。しかし彼らは戦士としては勇敢で、人間の血に熱狂する。また住居を人間の髑髏をもつて飾るのを最上の名誉としている。……従来を観察によれば、彼らの間には盜癖がなく、いかなるものを外に置いていても盜まれることはない。」

しかしながら、他面では種々なる困難と戦わねばならなかった。先ず風土、食物の不慣れであつたことはいふまでもない。またこの地のダヤク人、中国人、アラビア人、マライ人、及びブギス族等、それぞれ異つた言葉を用ゐるので、これは伝道上非常な不便となり、これには言語習得上の大いなる努力を要した。また政府の方針が外国人の居住を海岸地域に限り、奥地に進むことを禁じていたのも困難の一つである。すなわち宣教師の觀察によればモントラドが居住に最も適すると思われたので、当局に申請したのであるが、容易に回答が得られなかった。彼らの最大の困

難は、当地の回教勢力であつた。ボルネオのマライ人、アラビア人、ブギス人らは概して回教を信奉していたので、彼らに対する布教は容易なことではなかつた。ヤングブラッドの一八四一年の報告によれば、⁽¹²⁾

「ポンチアナクにおける布教の苦心は他の回教圏におけるよりも一層大きい。というのは、住民の反抗と小酋長及び祭司——殊にアラビア人の祭司——による影響に基づくものである。しかし少数の土着の酋長は従来西洋人と交渉をもつたことがあり、彼らはキリスト教に対してもあまり偏見をもっていない。他の困難は彼らを訪問するにあたり、その住居の場所が不便であることである。彼らは大抵海岸の小屋か河上の筏の上で暮しているが、これを訪問するには小舟を要し、これを雇うには、その距離と時間に従つて三仙から四十仙を要する。またこの場所が散在しているので、一度に多くのものに伝道することができない。それだけではなく、若し早朝あまり暑くならない間に訪問すれば男子は家に居ず、女、子供は戸を閉じて応接しない。日中に行けば彼らは大抵昼寝をしており、日暮一、二時間前に行けば男は大抵在宅であるが、彼らは回教徒の慣習に従つて祈禱をしておるものや今から祈りをしようとしているものが多く、それで家に他に誰もいなければ来訪者は呼び入れてもらえない。また宣教師にとって訪問するのには一番都合なのは四時か五時頃以後であるが、この時間にかぎって彼らは訪問者を歓迎しない慣習がある。さらに他の方面の困難としては、人民の無思慮と無知であつて、彼らは三位一体、キリストの受肉及び十字架に懸けられ給うたことを述べるとき、これを愚弄し嘲笑するのである。しかしこれはいずれの回教国においてもすべての忠実なる宣教師が直面するもので、とくにこの地において甚だしいというのではない。」

と見えている。

アメリカ宣教師達はこのような諸困難にもかかわらず、先ず住民の教育に力を注ぎ、着任の翌年である一八四〇年には中国人のため一学校が設立され、二十名乃至三十名の中国人が入学した。その他ヤングブラッド夫人は数名のマライ人の女児童に教育を授けた。またヤングブラッドはマライ語を研究し、マライ語で説教するとともに、自分でマ

ライ語のトラクトを印刷して人々に配布した。

一八四二年のアメリカン・ボードの報告によれば、⁽¹³⁾ ネヴィウスとその家族はネヴィウス夫人の健康が悪化したためシンガポールへ歸えり、トムソンとポールマンの二人が来援している。すなわち、トムソンは一八四二年二月四日ポインタナクに到着、ヤングブラッドの家に寄寓した。そしてこれにつづいて、ポールマンは同年八月五日同地に到着、更に二十七日にはドティがサンバスからポインタナクに到着した。トムソンはそれまでバタビアで布教していたが、オランダ当局はアメリカ人の布教をボルネオに限ったので、今般来島したのである。この年またマライ人学校が設立され、十五名位の生徒が在籍し、その中半数は女生徒であった。

前述のように、東インドのオランダ政府は、外国人宣教師が東インドに伝道する場合、これをボルネオに限り、また第一年目をバタビアに過ぎねばならないと規定していた。しかしこれは外国人宣教師にとって甚だ不便であった。それだけでなく、オランダ人以外の伝道者はボルネオの海岸地方に限られ、奥地への進出は禁じられていたので、アメリカン・ボードは、在アメリカのオランダ改革教会に同教会のフェリス (Isaac Ferris) をオランダ政府へ使節として派遣することを依頼した。もしでれば、これらの制限を撤廃されるよう交渉するためであった。フェリスはこの申出を承諾し、一八四二年六月一日にロッテルダムに着いた。彼はオランダ外国伝道協会の役員達により懇ろに迎えられたが、意外なことには、同協会はオランダ政府の東インドへ宣教師はボルネオ以外の地においてオランダ人に限るという制限が設けられたこと、及び事実においてはその地への宣教師を同国人からは殆んど得ることができない事情にもかかわらず、これを大なる問題としていないことであった。しかしフェリスの要求により、同協会から委員が選ばれ、政府と同問題に關して交渉が進められたが、その結果は思わしいものではなかった。同協会のフェリスにこの問題を一時自分達に一任するよう勧めた。しかしフェリスは同協会の了解を得て自ら植民大臣に面会し、事情をうったえたのである。その結果、オランダ政府は、この制限が決して単なる東インド当局の意思でなく、本国政府の方

針に基づくものであることを述べ、またこれはただにアメリカ人のみでなく、一般外国人への制限であるので容易に変更できないと答えた。ただし、同大臣はフェリスに少なからざる好意を示し、同情をもってその陳情を聴取したのである。こうしてフェリスは充分目的を果すことなく帰ったが、帰米後の報告によるならば、オランダ政府は一般的には従来の方針を変更する意思のないこと、しかしボルネオに関する限り、多少の便宜を与えるよう考慮するというのがその交渉の結果であった。アメリカン・ボードは失望するよりもむしろこれにより励まされ、ボルネオに対する伝道を一層促進しようと考えた。

こうした機運にあって、一八四二年カランガンにおけるダヤク族のために一布教所が設けられた。その年九月トムソンがその任に当たることになった。そして彼はカランガン河の岸辺に一家屋を建築して伝道することになった。その家は住民が手伝うのを好まないため、彼自らの労力で作ったもので、ジャングルの中に、粗末なものを二つ造ったのである。そして一八四三年一月にはトムソンはその家族をここに呼び寄せ、又三月にはヤングブラッドとその家族をも加えて伝道は活気づいた。しかしダヤク人は彼らが期待したほど集会に集まらなかった所以他们は、住民の家を訪れて廻るのであった。トムソンは、家族のものが健康を失って、次々に病死したので極度のハンディキャップにあったにも拘らず、よくこれに堪えて伝道した。殊に彼はダヤク語を学び、教義問答を土地の言葉に訳し、又、ダヤク語の小さな讃美歌をつくった。これは二十の讃美歌をダヤク語で編纂したものであり、これを自分で印刷した。これはダヤク語の最初の印刷された書籍であった。その他彼はマタイによる福音書と、創世記一―二十章をそれぞれ一八四五年に翻訳したが、これらは未出版に終わった。彼はこの間、次々に家族が病死し、彼自身も遂に健康を害したので、一八四七年この地を去ったのである。⁽¹⁵⁾

一方、ドティとポールマンはポンチアナクで、伝道に励み、つねに中国語の勉強に余念がなかった。彼らは中国が伝道に門戸を開くときが来たら、そちらに移る計画であった。一八四三年の報告によれば、ポンチアナクの中国人学

校の生徒はその年の現在教男子十一名、女子六名となっており、日曜日の中国語の礼拝には出席者は殆んど教師と子供ののみで、あまり発展を見ないことが述べられているが、その理由として、次のようなものがポールマンの書翰に挙げられている。即ち、当地の中国人は浮動性が多く、彼らの唯一の目的は金を稼いで故国に送ることであり、多くの資産を得れば本国に帰える。また彼らは主として下層階級のものであり、賭博と阿片の喫煙等の悪習があり、教育に余り適しないというのである。又、この年同地のマライ人学校の生徒は七名の男子であり、その中三名はアラビア語とローマ字に通じ、英語を学んでいるものもある。又日曜日のマライ語の礼拝出席者は二十名位であると報じられている。こうしてドティとポールマンは主として中国人を相手に伝道し、中国行きを機会を待っていたが、たまたま阿片戦争のためにそれが妨げられていた。しかるに、この戦争も終り、香港は開港となったので、彼らは一八四四年にアモイに移ったのである。

ここで特に一言すべきは、このボルネオに來た宣教師の家族達の健康のことである。他の場所でも、この当時には随分犠牲が多かったのであるが、ボルネオもその点が特に目立っている。すなわち、トムソンはバタビアに一八三九年から四一年にかけて滞在したが、このとき彼の最初の妻が病死し、ボルネオに來てからは一八四三年十月幼児が死に、翌一八四四年三月には第二子が五才で死んでいる。そしてその年十二月には第二の妻が旅行先きで病死し、その直後また一人息子が死に、遂に彼自身も健康を害して、帰国を余儀なくされ、ヨーロッパを廻って帰る途中スイスのベルンで一八四八年三月三日に逝去した。辛うじて二人の娘がアメリカへ歸えり、彼らは長じてそれぞれ牧師の妻となったのである。その他のボルネオへの宣教師の中、ネヴィウスはポンチアナクで一八三九年から一八四二年まで活動して、特に彼は白人未踏の奥地へ踏破を試みたのであったが、夫人が健康を害したので、帰国しなければならなくなつた。ドティはボルネオを去るまでは無事であったが、マカオに移ってから健康衰え、中国を去らねばならなくなつたが、一八六五年四月六日、アメリカに到着する四日前に遂に逝去したのである。ヤングブラッドもよく活動

し、彼は一番後までダヤク族への伝道に従事したが、最後に健康をそこねて、一八四九年帰国せざるを得なくなった。当時のボルネオの伝道が、いかに健康上最も困難な場所であったかを知ることができる。

その間、一八四三年にはスティール (William H. Steele) がバタビアからこの地に移り、カラングンでヤングブラッドとトムソンとを助けていた。しかし、一八四四年ドティとポールマンがアモイに移って後はポンチアナクに宣教師がいなくなったので、ヤングブラッドがカラングンからポンチアナクに移ったのである。しかし、一八四七年トムソンとヤングブラッドは共に健康を害して保養のためボルネオを去ることとなり、トムソンはアメリカへの帰途ヨーロッパで死に、ヤングブラッドは一時シンガポールに退き、静養してもう一度妻とともにボルネオに帰任したが、その後も健康は思わしくなく、一八四九年の一月アメリカへ向ってボルネオを去ったのである。もう一人のスティールも健康悪しく、同年アメリカへ帰った。こうして一八四九年にはボルネオにアメリカン・ボードの宣教師は皆無となった。その後ヤングブラッドもスティールもボルネオへの帰任を切望していたが、健康上ボードの委員はこれを許すことができなかった。当時のアメリカン・ボードの年次報告を見るならば、一八五二年度までボルネオ・ミッシェンの名が記されているが、この年をもって同ミッシェンは終っている。しかし最後に「委員会は宣教師達によってボルネオで払われた努力と犠牲が無駄であったとは思われない。……その時かれた種はいつの日にか豊かな収穫を見るであろうことを確信する」と述べている。

五、むすび

アメリカン・ボードのボルネオ伝道は、十年ばかりの短い期間で終ったが、ボルネオに宣教師を送っていたアメリカン・ボード内の主体としてのアメリカ改革教会は、一八五七年に至ってアメリカン・ボードから独立して海外伝道を始めたのである。そして、一八五四年ペリー提督による日本の開港が成功したとき、アメリカ改革教会は直ちに日

本に宣教師を送ることを議し、かくして一八五九年に渡来したのがフルベック、ブラウン等の初期の宣教師達である。こう考えると、日本のプロテスタント伝道の先駆をなしたいわゆる横浜バンドの母体であるアメリカ改革教会と、それより数年前までボルネオで伝道したアメリカン・ボードとは密接な関係にあり、彼らが、日本に渡来するより前に、同じ東亜の伝道地で、多くの困難と戦った経験をもつものであったことを知るのである。

しかも、ボルネオにおける伝道が、政治力の拘束のあるところいかに困難であったかを見たのであるが、これとわが国プロテスタント伝道の場合と較べることは興味あることである。又、このことをボルネオの場合の文化のレベルと、わが国の場合とを較べて考えることができる。前者の場合、ボルネオはオランダと関係深かったためオランダ系のアメリカ改革教会が乗り出したのに対して、わが国の場合も従来オランダと最も関係が密接であったため、夙にこの改革教会から宣教師が送られたことも両者の間に関連を認めることができる。

注

- (一) E. T. Corwin, *Manual of the Reformed Church in America*, pp. 291-293; J. Tracy, *History of the American Board*, p. 247.
- (二) アメリカのオランダ改革教会のミッション (The Reformed (Dutch) Church and Missions) は一七九六年に設立され、主としてアメリカン・インディアンの伝道していた。これが一八三二年まで続き、この伝道協会の第一期と見られている。第二期は一八三二—一八五七年でアメリカン・ボードと合体時代。第三期は一八五七年以後となっており、再び独立して伝道した時代である。(Corwin, *Manual of the Reformed Church in America*, N.Y., 1902, pp. 237-245.)
- (三) *Missionary Herald*, Aug. 1833, p. 275.
- (四) H. W. Pierson, *American Missionary Memorial*, N. Y., 1853, pp. 364-394; Tracy, op. cit., pp. 294-295; *Chinese Repository*, Vol. III. Nov. 1834, pp. 307-324.

- (5) Report of A. B. C. F. M., 1837, p. 95; Tracy, op. cit., p. 324.
- (6) Ibid., 1837, pp. 92-93.
- (7) Voyages of the "Himmaleh" and "Morrison" in 1837, in Chinese Recorder, Vol. VII, 1876, No. 6, pp. 387-398.
- (8) Tracy, op. cit., pp. 340-341.
- (9) Ibid., p. 364.
- (10) Ibid., p. 384; Report of A. B. C. F. M., 1840, p. 143.
- (11) Report of A. B. C. F. M., 1840, pp. 145-146.
- (12) Ibid., 1841, p. 149.
- (13) Ibid., 1842, pp. 165-168.
- (14) Extracts from the Reports of the Rev. Isaac Ferris, D. D. Concerning his Mission to Holland, New York City, Oct. 27, 1842 (Appendix to the Report of A. B. C. F. M., 1842)
- (15) Pierson, op. cit., p. 358.
- (16) Report of A. B. C. F. M., 1843, p. 139.
- (17) Pierson, op. cit., p. 362.

The Borneo Mission of the American Board

Résumé

This is a study of the mission work of the American Board in Borneo in relation to the starting of its activities in Eastern Asia before it opened its missions in Japan.

The pioneers in Dutch Borneo were missionaries of the Reformed Dutch Church in America who were engaged in the Borneo Mission (1838-1852) as members of the American Board. Although they were confronted with several difficulties they labored on the island from 1839 to 1849.

Our interest is in the sociological observance of the process of the mission work in such geographical and sociocultural handicaps as were found in Dutch Borneo.